

脱ぎたがりやさんと
二人きりキャンプ



成人向け

○○ちゃんと二人でキャンプに行くことになった。

彼女の母親に、「キャンプに行きたいとねだられたが、うちには道具もないので、代わりに連れて行ってやってほしい」と頼まれた。



○○ちゃんは近所に住んでいる子だ。朝会うたび、元気に挨拶してくれる。

俺は以前から庭でキャンプ道具を干したりしていたので、この子はそれを見て興味を持ったのかもしれない。ちようど夏休みみたいだし、悪くないだろう。

キャンプ当日、彼女の家の前で助手席に乗せ、出発した。
初めてのことが多くて心配だが、大人としてしっかりしなければな。
不安そうな顔などはしておらず、とりあえずは安心だ。



○ちゃんは膝を立てて座っている。下着が見えてしまいそう……
いや、見えている、パンツが…… いかんいかん、年端もいかぬ女の子に……。





食材と昼食を調達するために、道中のスーパーに寄った。
子供と一緒に買い物をしていると、自分が小さかった頃を思い出すようだ。

ん……ふと胸元が気になってよく見てみると、乳首が隙間から見えている……
下着は着けてないのか……この歳なら普通なのか？よく知らないな……
この子はかなり軽装が好きみたいだな……

キャンプ場に向けて走っていると、○○ちゃんはこんなことを言い出した。「ねえお兄さん、スポン、ぬいでもいい？」

そう言うやいなや○○ちゃんは、するつとズボンを脱いでしまった。



「わたし、はだかの方が好きなんだけど、家だとお母さんにおこられちゃって……」
○○ちゃんはパンツまで脱ぎ捨てて、下半身すっぽんぽんになってしまった。
いろいろと想定外だ。やめさせた方がいいのか、それすらも分からない……。

予定していた定番キャンプ場はキャンセルし、人気の全く無い山奥のポイントに変更した。
お母さんにも場所を連絡したし、問題は無いはずだが……



目的地に到着。
人がいないのを確認するやいなや、○○ちゃんは車から飛び出していった。

ここは公営のキャンプ場だが、他に人が居たことは一度もない。○○ちゃんにとってはちょうどいい場所……かもしれない。



お母さんに頼まれていたとおり、○○ちゃんのスマホで記念撮影をする。
お母さんに送る写真でもあるので、下半身が写らないように、慎重に画角を合わせた。



予定外の移動が入ったので、もうだいぶ日が傾いている。少し急いで準備をしなければ。
夕方とはいえ真夏の炎天下・・・非常に暑い。



○○ちゃんは、俺が作業しているところを、横からじつと見つめてくる。
日陰で遊んでもいいよ、と言っても、うん、と返すだけで、動こうとはしない。

暗くなる前にテントが完成した。

〇〇ちゃんは初めてのテントに興奮しているようで、自分の荷物やマットを搬入したりして、静かにはしゃいでいる。

お、お尻丸出しだよ……本当に恥ずかしい子なんだな……。



焚き火に火をつけ、夕食の準備だ。

○○ちゃんの姿にも、なんだか順応してきた気がする。今は純粹に可愛く見えてきている。



○○ちゃんと一緒に選んだ肉や野菜を焼いていく。肉のいい匂いがサイトを包む。

焼けた肉を○○ちゃんの取り皿に分ける。
「家では焼き肉は食べる？」 「うん、たまに……」



すっかり腹を満たした。火が自然に弱まるまで椅子に腰掛け、紫色の空を眺める。

この時間がキャンプの醍醐味だ。それを他人と共有できるというのは、たいへんな贅沢だ……。

〇〇ちゃんも付き合ってくれるみたいだ。学校の話など、色々聞かせてくれた。

しかし、本当によく落ち着いていて、いい子だな。すぐに脱いでもうことを除けば……。



すっかり暗くなって、星が見えはじめた。火も少し弱まってきた。
○○ちゃんは火をじっと見つめて黄昏れている。炎の光が○○ちゃんの瞳に反射して、ゆらゆらとゆらめいている。



お風呂代わりの蒸しタオルを作ってあげた。だいぶ汗をかいてしまったからな。

・・・どうやら、俺に拭いてもらいたいらしい。シャツを脱いで腕を上げて、じっと待機している。

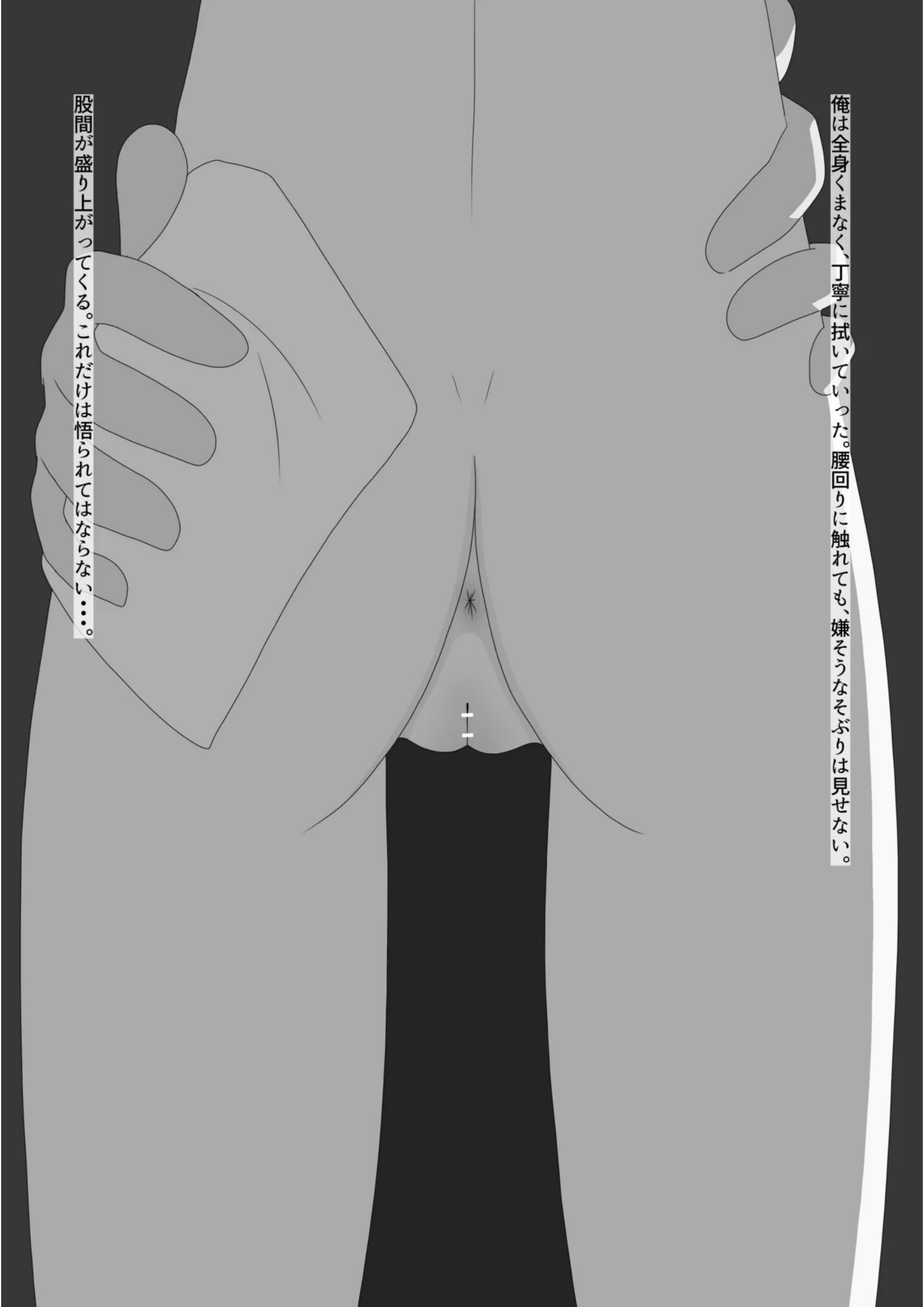


「もう真っ暗だね、怖くない？」
「うん」

○○ちゃんの体はまだ未熟で、女らしさはない。凹凸に乏しくほっそりしており、乳房の膨らみもまだまったく無い。
○○ちゃんは完全に心を開いてくれている。俺も心に余裕が生まれて、つつい、○○ちゃんの体つきを観察してしまう……。

俺は全身くまなく、丁寧に拭いていった。腰回りに触れても、嫌そうなそぶりは見せない。

股間が盛り上がってくる。これだけは悟られてはならない……。



トイレに行きたいと言われた。トイレはここにはない。下の無人管理棟まで、歩いていなければならない。
○○ちゃんは全裸のまま。大人でも怖いくらいの真夜中の山だというのに、したたかな子だ。

管理棟までの真っ暗な道を進む。○○ちゃんはぎゅつと腕に掴まってくる。



トイレには男用の小便器と、和式便器しかない。清掃も行き届いているとは言えず、不気味な雰囲気だ。
着衣の有無には関係なく、小さい女の子には厳しい環境だろう。
小便器の前で立ち往生している。さすがに無理か。



どうやら担いでもらわないと出ないらしい。持ち上げてやって、脚を目いっぱい開かせてやった。

○○ちゃんはどうかおしっこを出そうと頑張っている。あそこが時折、びくびくと動いている。



しばらくするとブルつと体が震えて、勢いよくおしっこが出た。

「出た……」

「うん、頑張ったね……早く戻ろうか」



テントに戻った。さつき体を拭いたばかりだが、また汗をかいてしまったな。
○○ちゃんは脚を大きく開いて、じっとこちらを見て、甘えてきた。
「あ、あの、ふいて…ふいてほしい、です…」

…そうだな。トイレトペーパーが切れていて、綺麗にしていなかったな。



「中まできれいにしようか……ちよつと広げるよ……」

はあ……ついにやってしまった。ごめんな、○○ちゃん……
……体はまだ小さいけど、性器はしっかりと形作られている。ちゃんと女の子なんだな……





「歯ブラシ…歯ブラシ…」

ああ、磨き終わったら、もう一回トイレまで行かなきゃいけないな。
ごめんな、段取りが悪くて…。

「おー、体柔らかいね……」
「えへへ……」

トイレから戻り、外のランタンを消してテントに入る。
○○ちゃんは初めてのテントに浮かれているのか、それとも
体を動かし足りないのか、くねくねと落ち着かない様子だ。

○○ちゃんは少々退屈さを隠せなくなってきた。狭いテントの中で、色々なポーズを取って見せてくれる。最初の予定ではもっと遊び場のある場所に行くはずだったが、この何もないキャンプ場では暇なものも致し方ないだろう。エネルギーを余らせている様子だ。

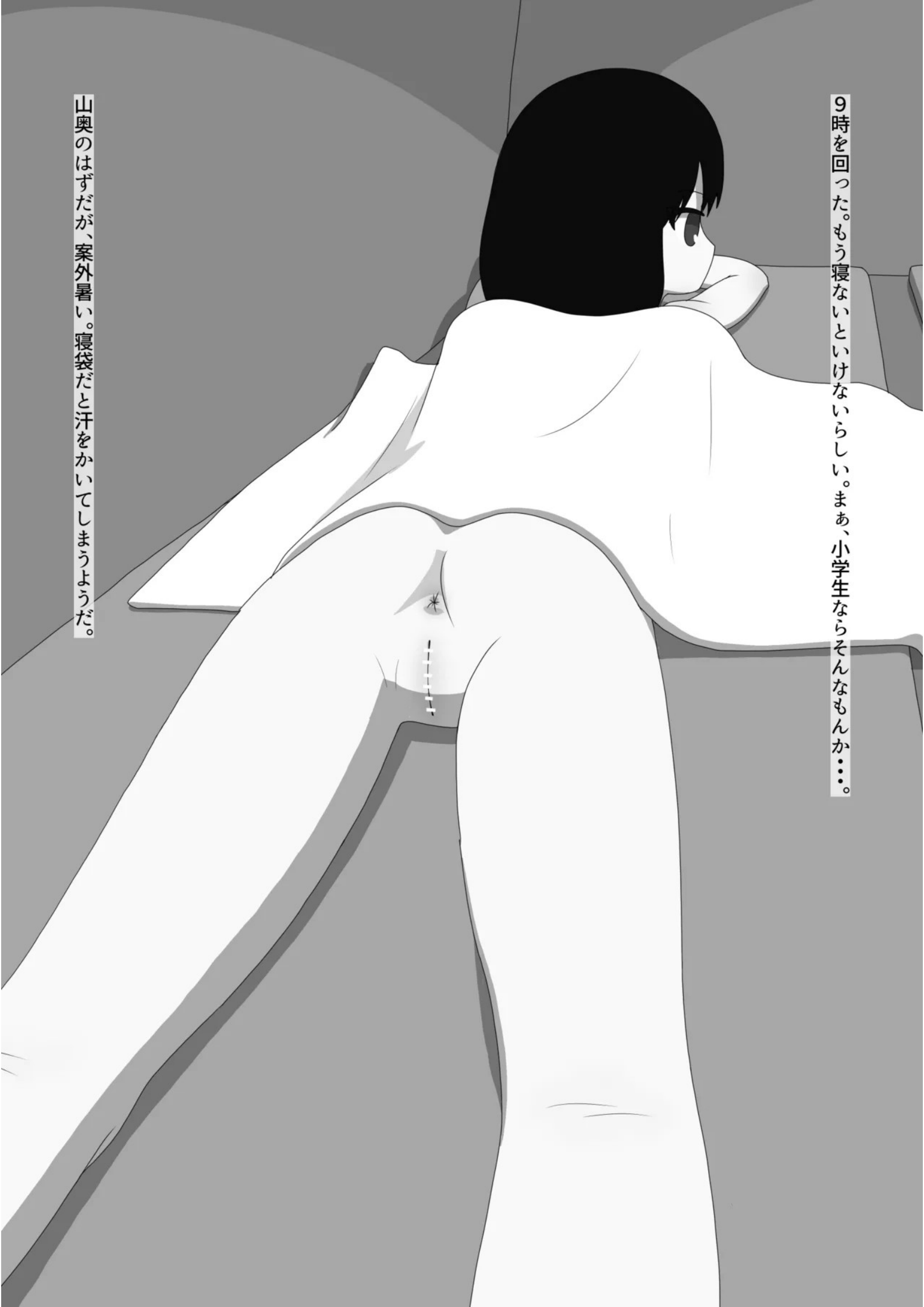


「○○ちゃんはいつもそんな恰好なの？」
「ううん。足開いてるだけで、おこられちゃう……
おふろ上がりとか……」
はだかの方が、気持ちいいのに……。」



9時を回った。もう寝ないといけならしい。まあ、小学生ならそんなもんか……。

山奥のはずだが、案外暑い。寝袋だと汗をかいてしまうようだ。

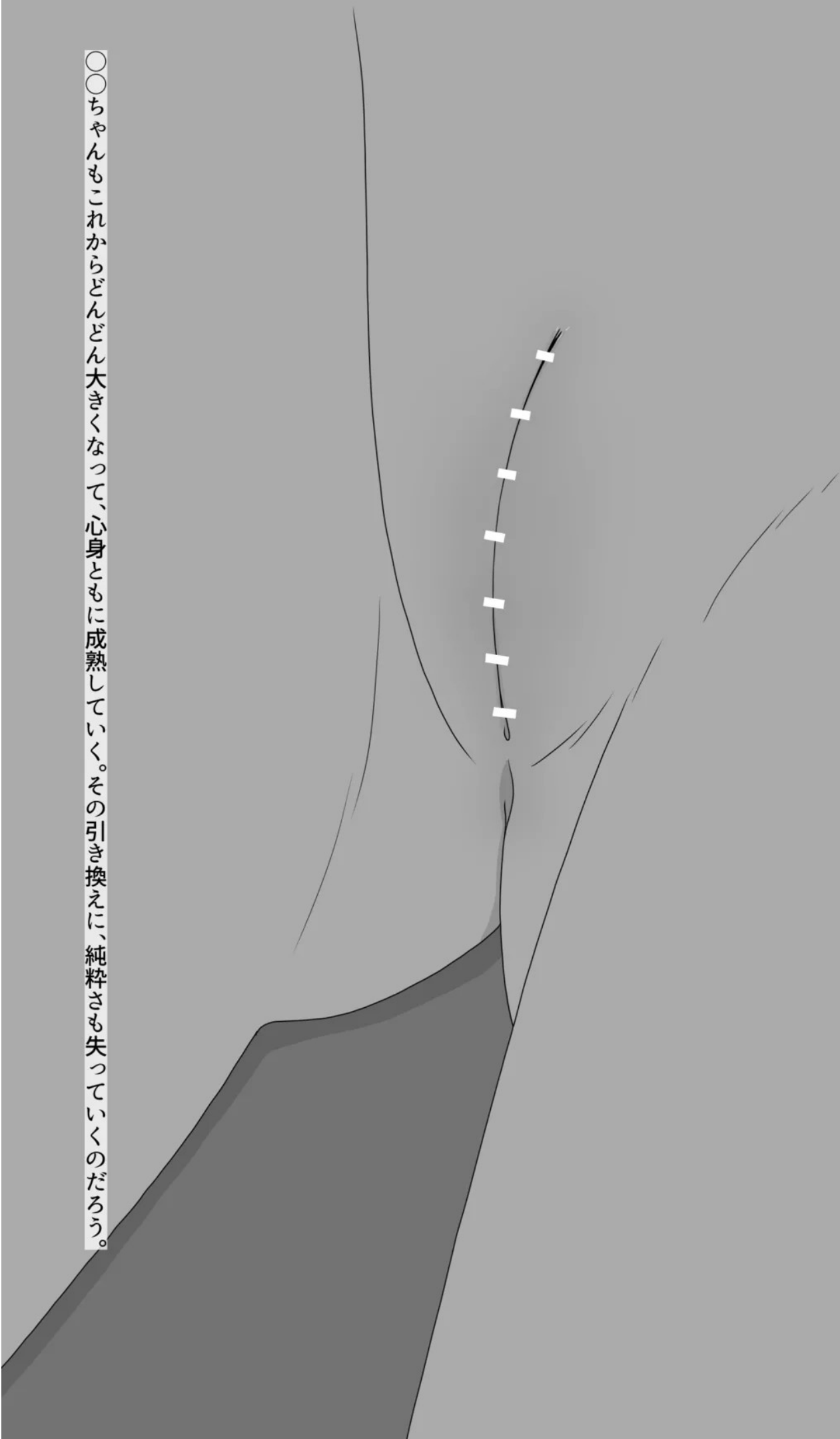


…1時か。慣れない早寝のせいで真夜中に起きてしまった。○○ちゃんは、深い眠りについている。



○○ちゃんの体は、呼吸にともなって、ゆっくりと上下している。どこを見てもすべすべで、一点の陰りも無い。触りたくなる衝動は、ぐっと抑えた。さすがに寝込みを襲うことはできない。その代わりに、気づけば一時間近く、○○ちゃんの体を眺めていた。

○○ちゃんもこれからどんどん大きくなって、心身ともに成熟していく。その引き換えに、純粹さも失っていくのだろう。



子供の成長は早い。一年ほど見ないうちに様変わりしてしまうこともある。
今の□歳の○○ちゃんは、今この瞬間にしか見られない。

そう思うと、いつまで経っても、目を離すことができなかった。



5時。少し白んできていてぼんやり明るい。
外は霧雨のようで、空気はぬるく湿っている。



枕を○○ちゃんのお尻の傍まで持って行って、寝転んでじっくりと眺める。

これまで当たり前に交わしてきた挨拶も、ランドセルを背負った後ろ姿も、今思い返すだけで感慨深く感じられてしまう。いままで○○ちゃんをこんな目で見るようなことは、ほぼ無かった。が、もはや手遅れだ。キャンプが終われば、俺も彼女もいままで通りの日常に戻る。変わってしまったのは、俺の意識だけだ。

5時半、○○ちゃんが起床。テントの中で霧雨が止むのを待つことにした。
「お腹は空いてない？」
「うん、まだ」

薄暗い光と霧の匂い、しっとりとしたぬるい空気に包まれる。



○○ちゃんはすっかりくつろいで、それなりに暇を楽しんでいるようだ。
「キャンプ、もうおわっちゃう?…」
「そうだねえ…あと2時間ぐらいで帰りかな…」



霧はほとんど晴れて、日が差してきた。
ラジオ体操をするらしい。終わったらカードにサインをして欲しい、と頼まれた。真面目だな、○○ちゃんは。

○○ちゃんはラジオの音声に合わせて、素っ裸のまま、元気いっぱい体に動かしている。

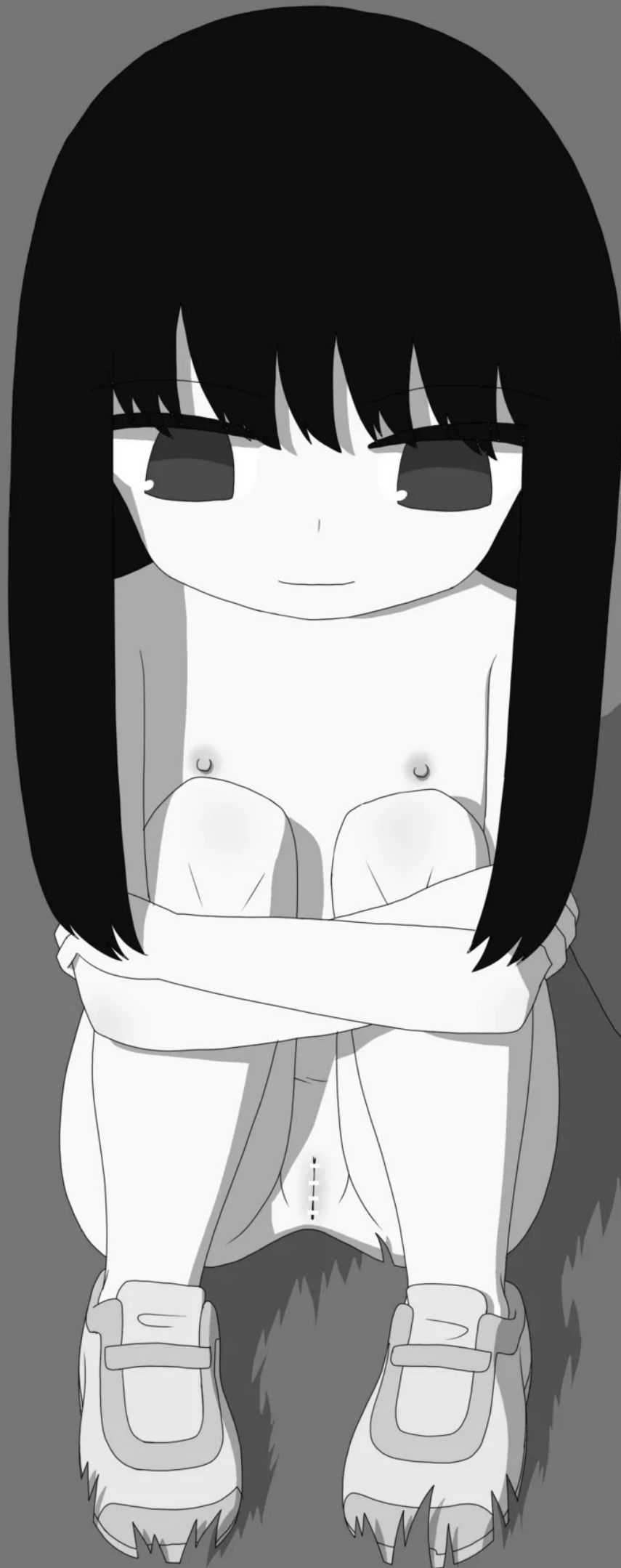


「もうちょっとゆっくりしていこうか。あと1時間したら、片付けるよ」
「うん…」

涼しい空気と日の光を浴びながら、朝のラジオを聴く。○○ちゃんは全裸でくつろいでいる。
この時間が終わってほしくない。こんなに名残惜しいのは初めてだ。



遂に撤収の時間になってしまった。
○○ちゃんは片付けの様子を、しゃがみ込んでじっと観察してくる。
丸まった子供の体は、ころころとしていて可愛いな……。



「○○ちゃん、片付けたらもう帰るよ。着替えてきたら？」

「……うん……」

「またキャンプ行きたい？」

「うん！うん！」



7時半を過ぎるとすっかり晴れて、暑くなってきた。もう終わりか。あつという間だった。



「○○ちゃん、その服かわいいねえ 写真撮ってお母さんに送ってあげよう」
「ほ、ほんと？ えへへ…」

「○○ちゃんは目に入れても痛くないほど可愛いし、本当に楽しかった。○○ちゃんが望む限り、何度でも連れてこよう…」



車で入口まで降りて、管理棟のトイレに寄った。
トイレから出ると○○ちゃんは、自ら性器を広げて見せてきた。
「おにいさん、ふいて・・・♪」

まずい、変な癖を付けてしまったかもしれない。
「○○ちゃん、普段は普通にしてなきゃダメだよ？ お母さんにバレたら大変だよ？」
「うん、わかってる お兄さんとの、ひみつ」



「○○ちゃん、そういえば今パンツ穿いてる?・・・」
「・・・だいたいぶ、あとではくから・・・」



脱ぎたがりやさんと二人きりキャンプ

初版：2024年12月19日

転載を禁ずる。
エゾ

未成年者に対する性的行為は、被害者に甚大な悪影響を与えます。
本作は、描写されている行為を肯定するものではありません。

